

こころざしつたふれし少女(をとめ)よ 新しき光の中におきておもはむ

土屋 文明



土屋 文明（1890 年～1990 年）、『アララギ』の総帥、歌人。日本芸術院会員、文化勲章受章者。若き日の4年間は教育者として諏訪高女とともにあり、教え子が伊藤千代子。

伊藤千代子

伊藤千代子（1905～1929年）と土屋文明との運命的な出会いは、諏訪高等女学校へ入学した1918年（大正7年）4月です。



（諏訪高等女学校校長の時代）

土屋文明からは英語、国語、修身の授業を受け、さらに土屋テル子夫人宅で英語補修を受けていたといわれます。この4年間に豊かな感受性とひたむきな情熱をひそめる千代子は、東京女子大に入学。

社会諸科学研究会に入り、長野県の製糸工場の大争議の支援もします。3・15（1928年）事件で特高に逮捕。拷問を受け、24歳の若さで実質獄死します。

「こころざしつたふれし少女」は、それから5年後、『アララギ』1935年（昭和10年）11月号を飾った土屋文明の短歌、他に「高き世をただ目ざす処女（おとめ）らここにみれば 伊藤千代子がことぞかなしき」もあります。

戦前、天皇制国家の専制支配と侵略戦争に反対し、たたかった日本共産党員など多くの人々が死刑法である治安維持法で逮捕され命を落としました。この中には、多くの若い女性もいました。化粧用のコンパクトに「鬪争・死」の文字を刻み獄死した飯島喜美、特高におそわれ重傷を負い死去した高島満兔（まと）、獄中でチリ紙に「信念を

まっとうする上においては、いかなるいばらの道であろうと…」という姉あての手紙を残した田中サガヨ、それに、伊藤千代子の四人をあげ、「それぞれが二十四歳の若さで、侵略戦争に反対し、国民が主人公の日本をもとめて働いたことは日本共産党の誇り」

（『日本共産党の八十年』2004年5月5日(水)「しんぶん赤旗」）